

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320112

研究課題名(和文) 大学における通訳教育のための e ラーニング教材の開発とその学習効果に関する実証研究

研究課題名(英文) Development of e-learning open courseware for interpreter training at Japanese universities

研究代表者

染谷 泰正 (Someya, Yasumasa)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：40348454

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,500,000 円

研究成果の概要(和文)：近年、外国語教育の一環として通訳翻訳を授業に導入する大学が増加傾向にある。しかし、通訳教育は比較的新しい分野であることから、教授法や教材の整備が大幅に立ち遅れている。本研究は、このような現状に鑑みて、我が国の大学における通訳教育の理念及び教授法について一定の指針を提示するとともに、これを体系的な教材として具現化した e ラーニング教材を開発することを主たる目的に行われた。また、CALL 教室等の特別な学習環境なしに、より効果的な通訳訓練を可能にするための学習ツールとして、通訳訓練用に特化したデジタルレコーダーも併せて開発した。これらの成果は、通訳教育に携わる研究者・教育者に広く公開する予定である。

研究成果の概要(英文)：In this project, we have developed an online courseware for English-Japanese interpretation training at university. The main module of the courseware consists of four parts: Part 1 Language Enhancement Exercises, Part 2 Introduction to Simultaneous Interpreting, Part 3 Introduction to Consecutive Interpreting, and Part 4 Lectures in Interpreting and Translation Theories. The courseware is equipped with many new features including an interactive BBS where students can ask questions or exchange their views with classmates, and a JAVA-based built-in voice recorder. We have also developed a stand-alone digital player/recorder, with which students can practice both simultaneous and consecutive interpreting without requiring any special equipment or classroom environment such as a CALL system. The courseware will be made available to other institutions and students learning interpreting as soon as some of the technical as well as copyright problems are cleared.

研究分野：通訳・翻訳

キーワード：通訳 通訳教育 外国語教育における通訳翻訳 e ラーニング 教材開発 アプリケーション開発

## 1. 研究開始当初の背景

近年、日本では外国語教育の一環として通訳翻訳を授業に導入する大学が増加傾向にある。日本通訳翻訳学会が行った調査によれば、2005年度に通訳関連の授業を設けていた大学・大学院の数はおよそ105校にのぼり(染谷・斎藤他 2005)。翻訳については約183の大学・大学院が2008年度時点で何らかの形で翻訳を講座名に掲げた授業を行っていたことが報告されている(水野・長沼他 2008)。このように、通訳翻訳に関連する授業を設ける大学が増えてきた理由については多くの要因が考えられるが、そのひとつに「従来の英語教育の不満と、これを補完するものとしての通訳翻訳教育への期待」があり、これは「語学教育に対する社会のニーズの変化」(染谷 2010)とも強く関連している。

従来、通訳や翻訳は、外国語教育の場ではいわゆる文法訳読式教育への批判とあいまって、どちらかといえば否定的にとらえられてきた。しかし、Widdowson (1983) がすでに30年近く前に指摘しているとおり、これらの批判は通訳や翻訳に対する無知や間違った理解に由来するものである。これらの誤解はわが国では依然として根強いものがあるが、欧米諸国では、通訳翻訳が本質的な意味での言語能力の養成に大きく貢献する可能性をもつ分野であることが、近年、再認識されつつある(Cook 2010, Malmkjer 1998, Cambel 1998)。いわゆる TILT (Translation and Interpreting in Language Teaching) と総称される動きである。TILTの基本的な考え方は、通訳翻訳の訓練は、学習者の「言語運用能力」「異文化コミュニケーション能力」および「メタ言語能力」の3つの能力に強く働きかけるというものであり、わが国においてもこのような立場からの「外国語教育の一環としての通訳翻訳=TILT」に対する見直しの機運が高まってきている。

このような TILT への関心の高まりに対応して、前述のとおり、現在、通訳の授業を開講している大学は相当数に上る。これらの授業を担当する教員の多くは、通訳者としての実務経験をもった教員(専任または非常勤)であるが、通訳教育は比較的新しい分野であることもあって、教授法や教材について、他の学問分野に見られるような標準化や体系化がなされておらず、各教員が試行錯誤しながら毎日の授業を展開しているというのが実態である(染谷・斎藤他 2005)。

今後、我が国において TILT の理念が普及し、外国語カリキュラムの中に通訳や翻訳が正当に位置づけられていくためには、理論的かつ実証的な根拠にもとづいた体系的な指導法およびこれを実践するための教材の整備が不可欠であり、喫緊に対応を要する課題である。

## 2. 研究の目的

本研究は、前述のような観点から、(1)わが

国の大学における通訳教育の理念および教授法について一定の指針を提示するとともに、(2)その指針を教材として具現化したeラーニング教材を開発することを主たる目的とする。また、CALL 教室や同時通訳ブース等の学習環境の有無にかかわらず、より効果的な通訳訓練ができるようにするための方策として、学習者のパソコン上にインストールして使うことのできる多重音声対応の「通訳訓練用デジタルレコーダー」も併せて開発し、これを通訳教育に携わる研究者・教育者に広く公開する。なお、本教材が対象とする言語ペアは日本語と英語である。

## 3. 研究の方法

前記の目的を達成するために、研究初年度には、研究代表者がすでに実際に授業で使用している通訳訓練コースウェアのコンテンツを全面的に見直すとともに、新たなオリジナル素材を追加する作業を行った。

平成25年度にはコンテンツの作成および見直し作業を継続するとともに、効果的な通訳訓練のために必要な「通訳訓練用デジタルレコーダー」の開発を行った。同レコーダーは、基本的設計を研究代表者が行い、これを専門業者に委託して JAVA(サン・マイクロシステムズ社が開発したプログラミング言語)を使って開発した。限られた研究費の範囲内での開発であったため、機能は限定的にせざるを得なかったが、通訳訓練のために必要な最小限の機能は確保しつつ、技術的な知識のない一般の学習者でも直観的な操作で扱えることを重視した。

研究最終年度には、国内外の学会で研究成果を発表するとともに、研究代表者の勤務する大学において研究課題に関連する国際コキウムを開催し、内外の研究者および通訳教育に携わる教育関係者と幅広く意見交換を行った。

## 4. 研究成果

### 4.1 eラーニング教材

研究代表者の勤務する関西大学外国語学部では、より効果的な外国語習得のための各種語学教材の開発を進めているが、その中のひとつに、マルチメディアeラーニング教材「関西大学 英日通訳訓練プログラム」がある。現在、開発途中のこのプログラムは、「英語通訳訓練法入門」(約1.5GB)および「通訳訓練教材データベース」(約9.7GB)の2つのモジュールから成り、各モジュールのコンテンツはすべて標準的なHTMLページとして実装され、音声および動画データはマイクロソフト社のActiveX技術を使ってWebブラウザ内に組み込まれたプラグインプレーヤで再生する。プログラムの制御には

JavaScript および Perl CGI を使用し、インターネットに接続できる環境さえあれば、基本的には 24 時間、いつでもアクセス可能なシステムとなっている。

この2つのモジュールのうち、今回のプロジェクトの直接の対象は「英語通訳訓練法入門」である。図 1-1 に、そのトップページ(表紙ページ)を、図 1-2 に目次ページをそれぞれ示す。



図 1-1 教材(Web版)のトップページ



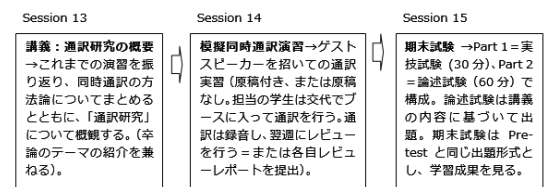
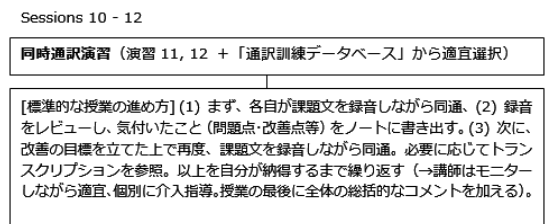
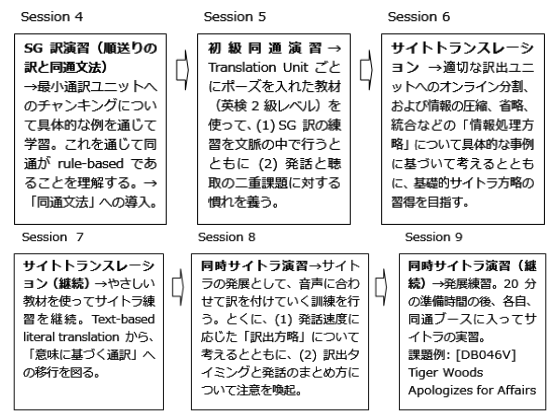
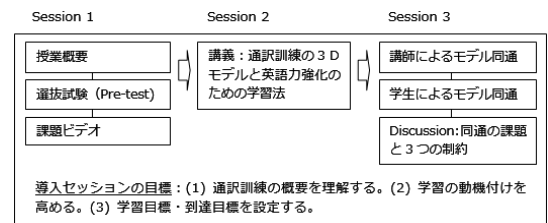
図 1-2 教材(Web版)の目次ページ

学習用プログラムの全体は、理論講義のための [講義編]、英語力強化のための演習課題を中心とした [基礎編]、逐次および同時通訳演習のための [実技演習編]、および通訳の基礎的なスキル訓練のための [基礎メカニカルトレーニング編]の4つのサブモジュールから構成されている。図 1-2 にはこのうちの理論編 (Theory Module)と基礎編 (Language Enhancement Module)の目次の一部が表示されている。

実技演習編は、同時通訳編と逐次通訳編の2部構成で、前者は演習7から演習12までの6ユニット、後者は演習13から演習21までの9ユニットからそれぞれ構成されている。いずれも大学での半期15回授業での使用を想定したもので、対象者は大学2年ないし3年次生で、通訳訓練を初めて受ける者、

英語力は TOEIC 800 点程度を想定している。以下、図 2-1 および図 2-2 に、同時通訳編と逐次通訳編の到達目標およびタスク配列の概要を示す。これは、あくまで標準的なモデルとして提示したものであり、クラスの実情に応じて適宜、変更することが望ましい。

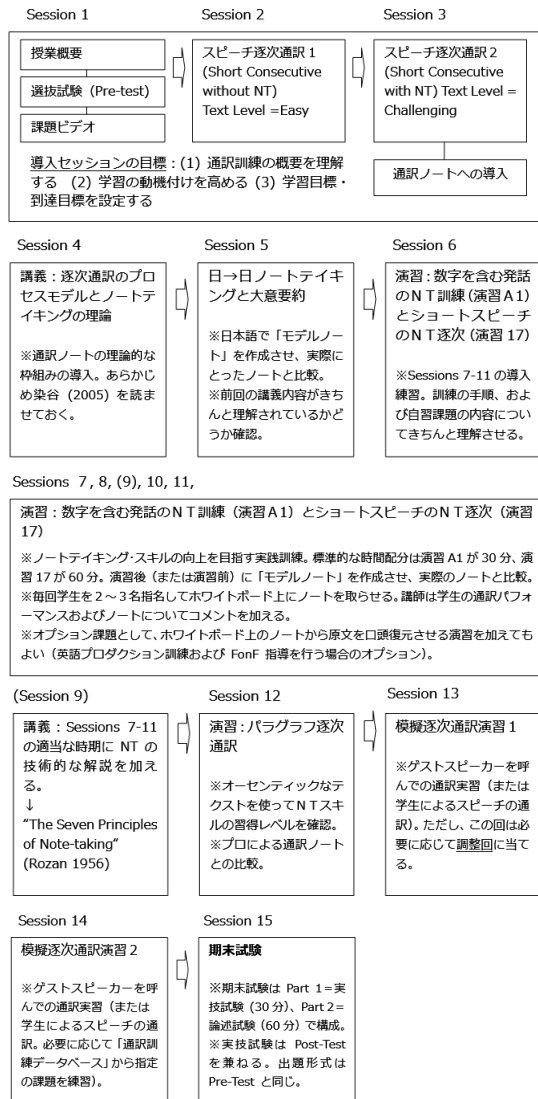
**同時通訳編の到達目標とタスク配列**：同時通訳編の到達目標は、実践面では、英日同時通訳の基本的なスキルを習得し、とくに専門的ではない一般的な内容のスピーチや対話を、70~80%程度の正確さ(訳出率)で同時通訳できるようになること、理論面では同時通訳における言語情報処理について理論的な観点から自分なりの説明ができるようになることを目標とする。授業の基本的な進め方(タスク配列)は以下の通りである。



**バリエーション**：Session 6 以降、毎回の授業の始めに学生による同通セッションを入れてよい(ペアを組み、1人が英文スピーチを行い、他の1人がこれを同時通訳する。スピーチは原稿を見ずにスピーチを行い、通訳者は原稿なしの通訳を行う。ただし、事前に打ち合わせをしてよい)。スピーチの長さは1分~2分。したがって、毎回、授業の最初の10分程度をこれに割くだけで済む。同通セッションは録音しておく(Session 3の「学生によるモデル同通」はこの方法で収録したもの)。スピーチのピックは (1) My Hometown のようなごく一般的なものから (2) 何らかのニュース記事を紹介しながら自分の意見を付け加えるものなど、学生のレベルと関心に応じて適宜、指示する。

図 2-1 同時通訳訓練モデルシラバスの構成

**逐次通訳編の到達目標とタスク配列**：逐次通訳編の到達目標は、実践面では、逐次通訳の基本的なスキル（とくにノートテイキング）を習得し、コース終了後には、とくに専門的ではない一般的な内容のスピーチや対話を「プロ」らしいスタイルで逐次通訳できるようになること、理論面では通訳における言語情報処理について理論的な観点から自分なりの説明ができるようになることを目標とする。授業の基本的な進め方（タスク配列）は以下の通りである。



**モデルノートとは？**

1. 原文を復元するのに必要な最小限の要素 (命題要素、モダリティ要素 [Propositional M, Interpersonal M, Textual M]) およびその他の付加的な要素) を抽出し、これを適切に構造化して紙面上に配置したもの。
2. モデルノートの作成を通じて、①原文の「命題リスト化」(命題形式への輪小化) が瞬時にできるようにすること、および②「最大効率性の原則」(E-principle) と「最大情報価値 (情報回復力) の原則」(R-principle) の 2 つの要請を満たすノートの作成に習熟することを目指す。
3. 直観的な NT から、説明可能な Rule-based NT への移行を図るとともに、大量の練習を通じて NT の自動化を促進するための手段。

図 2-2 逐次通訳訓練モデルシラバスの構成

なお、図2-1および図2-2 に示した学習モデルおよび本プログラムで提唱している指導法の理論的根拠については、前述の「理論編モジュール」の中で詳しく解説した。

学習者は、原則としてこの標準モデルに従って学習を進めていくことになるが、教材の各ユニットには、教師の指導のもとに教室内で行う学習 (Supervised class activities) のほかに、主として各自が教室外で自主的に行う自習課題 (Unsupervised self-learning activities) が用意されている。後者は主に自宅学習として行うことになるが、この際に役に立つのが、次節で述べる「通訳訓練用デジタルレコーダー」である。

**4.2 通訳訓練用デジタルレコーダー**

従来、通訳訓練を効果的に行うためには、そのための機器や教室環境を整備しておく必要があり、これが大学等の授業で通訳訓練を行う際のひとつのネックになっていた。そこで、本プロジェクトでは、特別な機器や教室環境がなくても、どこでも手軽に通訳練習ができる多重音声対応の簡易デジタルレコーダーの開発を行った。今回開発したのは、(1) ユーザーのパソコンにインストールしておき、必要ときに立ち上げることのできるスタンドアロン型の多重音声対応メディアプレーヤー (図 3-1) と、(2) HTML ベースの教材に埋め込み、ウェブブラウザ上から直接、音声の録音と再生を可能にする JAVA アプレット (図 3-2) の 2 種類である。

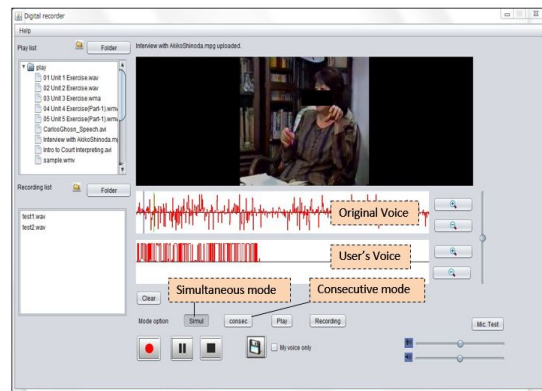


図3-1 通訳訓練用デジタルプレーヤー (スタンドアロン型)



図3-2 HTML埋め込み式ボイスレコーダー (JAVA アプレット)

スタンドアロン型のメディアプレーヤ（図3-1）は、標準的な音声ファイルと映像ファイルに対応しており、任意の教材ファイルを再生しながら、自分の音声を同時に録音することができる（教材の音声と自分の音声は別々のトラックに保存される）。また、逐次通訳モードでは、再生ボタンがトグルボタンになり、教材音声の聴取（および一時停止）と通訳音声の録音をワンクリックの操作で交互に行うことができるようになっている。

HTML埋め込み式のボイスレコーダー（JAVA アプレット）は、今回のプロジェクトで開発・整備したHTMLベースのオンライン教材に埋め込み、ウェブブラウザ上から直接（外部メディアプレーヤーを別途立ち上げることなしに）音声の録音と再生を可能にしたものである。録音されたユーザー音声は、自動的に研究代表者の管理するサーバーに保存され、即座に再生することができる。また、必要に応じて音声ファイルをユーザのパソコン上にダウンロードすることができる。

なお、図3-1 に示したスタンドアロン型の通訳訓練用デジタルプレーヤーは、国内外を問わず、一定の使用手続きを経た上で、希望者に無償で配布する予定である。また、HTML埋め込み式のボイスレコーダーについても、JAVA アプレットを埋め込むためのコードについては同じく無償で一般公開する予定である。

### 今後の展望

今回開発したオンライン教材は、現在のところ研究代表者の勤務する大学において稼働中であるが（図4、右側の枠内）、準備ができ次第、順次、国内外の教育機関およびそれらの機関に所属する学習者に無償で開放する予定である。

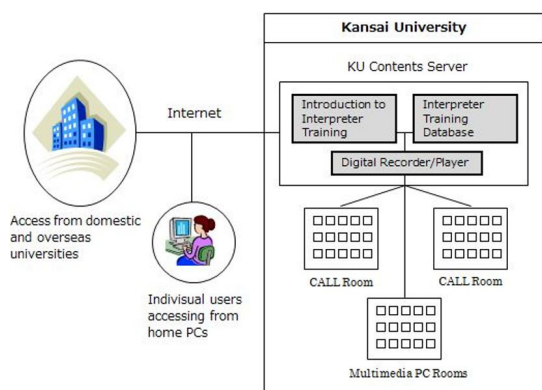


図4 教材のオンライン配信概念図

そのための課題として、今後、今回開発したeラーニングプログラムの学習効果に関する実証実験を複数の大学の協力を得て行うとともに、その問題点や課題を洗い出し、さら

なる改善を図っていくことが求められる。また、今回は開発に至らなかったラーニング用の学習管理システム（Learning Management System）についても、管理側の教員に負担がかからない簡易かつ堅牢なシステムを開発し、本プログラムに実装していきたいと考えている。

### <引用文献>

Campbel, S. (1998). *Translation into the second Language*. Addison Wesley Longman, Ltd.

Cook, G. (2010). *Translation in Language Teaching*. Oxford University Press.

Malmkjer, K. (ed) (1998). *Translation and Language Teaching*. St. Jerome Pub. 水野的・長沼美香子他 (2008)「わが国の大学・大学院における翻訳教育の実態調査概要」通訳翻訳研究 8号 (pp. 279-28) 日本通訳学会

染谷泰正・斎藤美和子他 (2005)「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」通訳研究第 5号 (pp. 285-310) 日本通訳学会

染谷泰正 (2010)「大学における翻訳教育の位置づけとその目標」関西大学外国語学部紀要第 3号 (pp.73-102)

Widdowson, H. G. (1983). "The deep structure of discourse and the use of translation." In Brumfit, C. J. & Jonson, K. (eds), *The Communicative Approach to Language Teaching*. Oxford University Press.

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計9件)

染谷泰正、関西大学における通訳翻訳プログラムの内容、日本通訳翻訳学会関西支部・関西IT研（通訳翻訳理論および教授法研究会）2015年2月28日、関西大学（大阪府吹田市）

Yasumasa Someya, Atsuklo Kikuchi, Yoshihiro Minamitsu, Developing Next Generation Open Courseware for English-Japanese Interpretation Training, The 17th World Congress of the International Association of Applied Linguistic, August 10-15, 2014, Brisbane, Australia.

Yasumasa Someya, Atsuklo Kikuchi, Yoshihiro Minamitsu, State-of-the-Art Open Courseware for English-Japanese Interpretation Training, The FIT 20th

World Congress, August 4-8, 2014, Berlin, Germany.

染谷泰正、通訳における<概念化>を巡って(続)、日本通訳翻訳学会関東支部、2013年12月8日、青山学院大学(東京都渋谷区)

染谷泰正、通訳ノートテイキングの指導法～理論に基づく体系的指導法を目指して、日本通訳翻訳学会、2013年9月7日、神田外語大学(千葉県千葉市)

染谷泰正、通訳における概念化を巡って～逐次通訳ノートからのエビデンス、日本通訳翻訳学会、2013年9月7日、神田外語大学(千葉県千葉市)

染谷泰正、通訳研究の現状と課題、関西大学英语学会シンポジウム「研究としての通訳翻訳」、2013年3月24日、関西大学(大阪府吹田市)

染谷泰正、英語教育における通訳翻訳の意義と位置づけ CEFRによる新たな英語力の定義に関連して、JACET教育問題研究会および関連諸学会共同主催「語学エキスポ2013」シンポジウム、2013年3月17日、早稲田大学(東京都新宿区)

⑨染谷泰正、英語教育と通訳翻訳 TILT (Translation in Language Teaching)は何を目指すのか、ことばの科学研究会、2013年3月10日、関西学院大学大阪梅田キャンパス(大阪府大阪市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

染谷 泰正 (SOMEYA, Yasumasa)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：40348454

### (2) 研究分担者

菊地 敦子 (KIKUCHI, Atsuko)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：20330178

南津 佳広 (MINAMITSU, Yoshihiro)

長崎外国語大学・外国語学部・講師

研究者番号：70616292